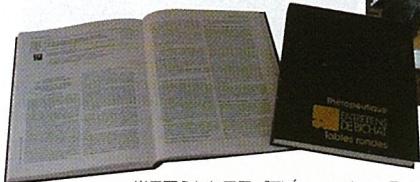


SPECIAL REPORT

特別レポート ~From BICHAT~

2004年仏・新薬治療発表会に 食品として初招待されたFPP

フランスを代表する病院のビッシャ (BICHAT／パリ) にて、2004 年の新薬治療発表会が行われ、食品としては初めて FPP が招待を受けました。当日は、FPP の学術顧問団であるリュック・モンタニ工教授、レスター・パッカー教授、フランシスコ・マロッタ教授(発表者はピエール・マンテロ博士)が、研究結果を発表。3 教授の FPP の発表は、製本後フランス全土 15,000 名の医師に配布され、患者の治療のための参考文献となっています。



当日配られた冊子『Thérapeutique Entretien De BICHAT』



大きなスクリーンを利用して発表が行われた

日常的に曝される酸化ストレスのシステムと FPP の関与

◆リュック・モンタニ工教授
バスツール研究所教授
(財)世界エイズ研究予防財団 理事長
エイズウイルス発見者

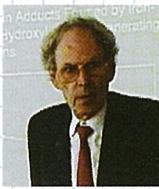


「我々は、細菌、ウイルス、バクテリア、酵母菌などに、日々感染しています。しかし、免疫のおかげで、これらの菌は完全に抑制され、体内に潜伏します。人間の身体が弱り始める 25 ~ 50 歳にかけて、これらの菌が広がり始め、病気を引き起こすのです。これらは、特に細胞段階で、フリーラジカル、活性酸素を生み出し、我々の組織を傷つけます。また、白血球の防衛反応によってもフリーラジカルの生成が促進されます。外的環境要因に加えて、酸化ストレス、すなわち過剰なフリーラジカルの生成と抗酸化物質(グルタチオン、酵素)の生成不足、もしくは必須栄養素(ビタミン、微量元素)の摂取不足のアンバランスが始まるのもこの時期。酸化ストレスは、人生の後半に現れるほとんどの病気の共通要因なのです。このアンバランスの修復には、バランスの取れた食事による栄養摂取、適切なライフスタイル、抗酸化物質の摂取などが必要です。酸化ストレスに起因する病気を予防できれば、今より 20 年以上も長く、積極的な人生を送ることを可能にする“革命”を起こすことができるのです」

教授はまた、パーキンソン病や HIV ウィルス感染者に対する臨床研究の結果も発表しました。FPP を摂取することによって免疫力の指標であるグルタチオンが上昇したので、医療を補完する役割を果たす新しい手法として期待されています。

FPP の抗酸化力が 細胞の免疫システムに どのように作用するか

◆レスター・パッカー教授
アメリカ 南カリフォルニア大学教授



「細胞の中では、複雑なシステムにより酸化ストレスに耐える構造になっています。ここでは大量のフリーラジカルが発生しますが、これは生命の維持に必要なものでもあります。しかし、いったんバランスが崩れると細胞はフリーラジカルによって傷ついてしまうのです。免疫機能に関係する主なフリーラジカルである NO と TNF α の変動を調べたところ、FPP によって細胞の免疫力が上昇するという結果が得られました」

現在まで行った FPP の臨床研究のまとめ

◆フランシスコ・マロッタ教授
イタリア ミラノ大学教授
消化器専門の臨床医
補完代替医療の研究・実践に取り組む



「アルコールなどが原因で機能が衰えた肝臓や胃の粘膜に対して、FPP を摂取した患者は、健常者と変わらないくらいまでに酸化ストレスに対する抵抗性や、養分の吸収因子が回復するという結果が得られました。また、DNA の酸化度を示す指標からは、DNA の酸化による損傷を防ぐ機能とともに、損傷を受けた DNA の修復を促す機能も高いことが分かり、これらの働きは、すでに高い抗酸化能力が認められているビタミン C や E、マルチビタミンよりも早く、高い効果が得られる事を示しています」



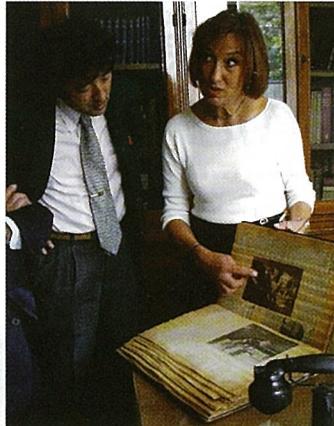
キュリー夫人の偉大なる研究記録

後世に残すためDVD保存に協力

放射性元素のラジウムを発見し、放射線を利用したがん治療の開発など、被爆を恐れずに人々のために研究を続けたマリー・キュリーの研究所が、パリにあることをご存知ですか？ その名もキュリー博物館 (Musée Curie)。ノーベル賞を2度受賞した偉大な夫人は、アメリカの招待を受け、イエール大学をはじめ、多くの大学で講義を行いました。この博物館には当時の新聞記事が1200ページに渡り、スクラップされています。しかし50年という時間がこの歴史的資料を風化させ、博物館の方々も保存方法について20年間も議論を重ねてきました。

2004年春、イエール大学出身のレスター・パッカー教授が、偶然にこの新聞記事のことを知り、大里研究所へ保存のための援助を求められました。同年8月11日、キュリー博物館所長

Claud Huriet教授と大里研究所代表の林との間で調印がなされ、キュリー夫人の歴史的記録がDVDに保存するため、1ページづつスキャンされています。今後は、多くのキュリー博物館来場者に貴重な資料を見ていただくことが可能です。パリに行かれたとき、足を運んでいかがでしょうか。ちなみにキュリー夫人直筆の手紙は、現在でも放射線反応を示すとのこと。研究に対する情熱と不屈の精神を、少しでも受け継ぐことができればと思います。



資料の説明を聞く代表(写真左)



スクラップされた1200ページにのぼる新聞記事



キュリー博物館のパンフレット



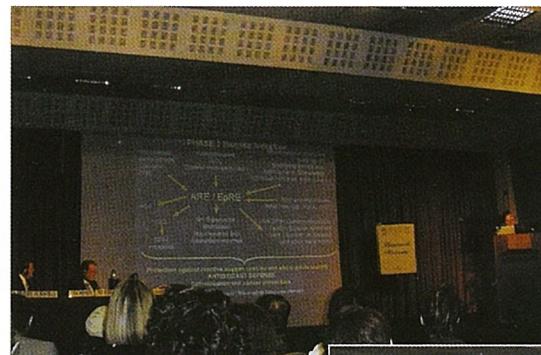
リュック・モンタニエ教授による講演風景



憧れの地・カロリンスカで 第46回ノーベル会議開催

2004年6月6～9日、科学者・医学者の憧れの地であるスウェーデン・カロリンスカ研究所にて、第46回ノーベル会議が開催されました。ノーベル会議はカロリンスカ研究所のノーベル委員が、その時代のトピックをテーマに開催する会議です。大里研究所は、ストックホルム市などとともに協賛をし、サテライトシンポジウムにてモンタニエ教授の基調講演をお手伝いしました。

今回のテーマは「酸化還元反応と細胞機能」で、今注目の酸化ストレスや体内的酸化還元のバランスについて議論されました。日本においても世界においても現在注目を浴びているこの分野に、FPPは深く関わっており、今後の研究が期待されています。



レスター・パッカー教授の講演風景



マンテロ所長の講演風景



酸化ストレスと病気の予防 伊・ミラノでの学会報告

10月2日、イタリア・ミラノにて酸化ストレスと病気予防の学会がユネスコ、ミラノ医師会の後援のもと開催されました。会場の定員は600名でしたが1000名以上の参加申し込みがあり、新しい分野である酸化ストレスに対する医師達の熱意を感じられました。

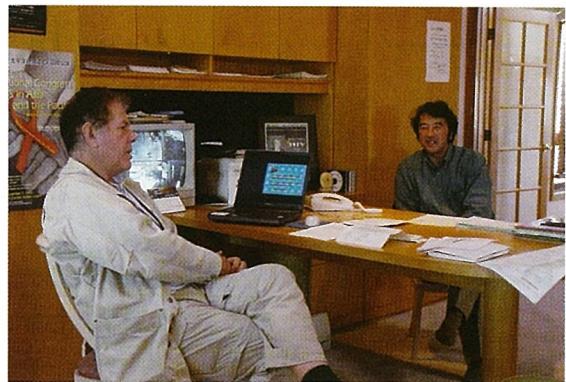
大里研究所からは、学術顧問である、リュック・モンタニエ教授（財団法人世界エイズ研究予防財団）、レスター・パッカー教授（アメリカ 南カリフォルニア大学）、エリゼール・ラハメルヴィッヂ教授（イスラエル ハダシュ大学）、マーク・ウェクスラー教授（アメリカ コーネル大学）、フランシスコ・マロッタ教授（イタリア ミラノ大学）、そして大里

研究所所長ピーター・マンテロが、FPPの基礎から臨床までの研究発表を行い、多くの参加者の注目を集めました。FPPがイタリアの医学界で受け入れられるための絶好のスタートとなり、発表後には、共同研究の要請がたくさんありました。一気に進むと思われるFPP研究の今後に、乞うご期待！

Topic 4

仏で著名なブレ氏とともに テレビクルーが撮影のため来日

2003年10月24日から30日、フランスで報道番組制作ディレクター兼キャスターとして著名なジャン・クロード・ブレ氏がカメラクルーを伴って、番組制作のため大里研究所を訪れました。フランスで一躍有名になったFPPとその生まれ故郷である日本を取材するため、大里研究所とFPPの製造工場であるネオリバー、そして、FPPと日本の関係を探るため、皇居や神社仏閣なども次々と撮影を行っていました。研究所では、所長のピエール・マンテロとレスター・パッカー教授が、FPPの可能性についてや分析方法についてインタビューを受けました。研究風景も撮影され、2004年3月にヨーロッパの衛星放送で放送されました。



代表をインタビュー取材中のブレ氏

Topic 5

世界エイズ研究予防財団が静岡で特別公開講座を主催

「第18回日本エイズ学会学術集会・総会」が2004年12月9～11日に、静岡コンベンションアーツセンターにて開催されました。2日目の10日には、大里研究所に併設されている世界エイズ研究予防財団が、特別公開講座を主催(大里研究所は協賛という形で参加)。これまで数々のチャリティ・コンサートを行ってきたピアニストの徳江洋子さんによるピアノ・コンサートのほか、世界エイズ研究予防財団の理事長であり、大里研究所学術顧問でもあるリュック・モンタニ工博士が講演をするとともに、来場したお客様との質疑応答で活発なやりとりをし、エイズや予防教育に対する理解が、より深まる貴重な時間をもつことができました。静岡市民の皆さんや地元の大学生など、多数の方々に参加していただいたことで、関心の高さや今後の研究への注目度を改めて実感いたしました。

モンタニ工博士の特別講演「エイズ研究：歴史と展望」

モンタニ工博士はエイズ研究の展望に重きをおいて話をしたいと語ったうえで、冒頭、HIVウイルス発見前後の経緯と歴史を簡単に紹介。そして、血液検査前の非熱処理血液製剤により、血友病小児の60%がエイズに感染したという不幸な時期があったことにもふれました。エイズの現状に関して博士は「薬品は良くなっているものの、HIVウイルスは今も広がりを見せてています。完治させることはまだ出来ません。ただ、ウイルスが体を免疫不全に至らすことに、酸化ストレスが関係していることに関してはすでに判明しています」と解説。さらに、トリプルセラピーと抗酸化物質の補完的治療において、FPP(パパイヤ発酵食品／国際基準をパスした工場で生産)を使用した臨床結果を発表しました。FPPを摂取することによって、CD4数値の改善や体重増加、ヘモグロビンの増加やアポトーシスが減少することなど、明らかに効果のあることを実証。さらに、大

規模な臨床実験を進める計画があることも公表しました。

博士は自身が理事長を務める(財)世界エイズ研究予防財団の、コートジボアールにある研究所の活動も紹介。「治療法は改善されたとはいえ、その治療を受けられる人は世界でも限られています。状況を良くしていくには、まず、青少年の教育や啓蒙が重要で、ワクチン開発などの予防医療にも力を注がなければなりません。財団としてはワクチン開発が最優先課題。それとともに、抗酸化物質を補完的に利用して治療を行うなどの治療法の実現も大切なことだと考えています」と締めくくりました。



財団の理事長でもあるモンタニ工博士の特別講演

2004年研究員活動

活動内容一覧	
1月	日本応用糖質科学会誌にラボが紹介される
2月	食品衛生の講習会開催 吉田研究員食品保険指導士資格取得
4月	ラハメルヴィッヂ教授来日
5月	第7回応用糖質科学ワークショップに参加
6月	研究員の制服を一新 子池研究員食品保険指導士の資格取得に挑戦
8月	清水博新研究員が入所 デジカメ付きの新顕微鏡を導入
9月	新潟で新しいポスターを発表 第8回応用糖質科学会に参加
10月	HPLC, GCのセミナーに参加

• 吉田研究員が食品保健指導士資格取得 FEBRUARY

(財)日本健康・栄養食品協会が養成・認定を行っている健康食品アドバイザー「食品保健指導士」の資格を、当研究所研究員の吉田地区が、2004年2月に取得しました。FPPの摂り方に関するお問い合わせに、食事や生活を含めた総合的な見地から、お答えしております。ご質問のある方はお問い合わせください。

*資格の性格上、疾病の診断や薬品についての指導はいたしかねます。



APRIL

2004年4月、イスラエルより、ハダッショ大学で教授を務めるラハメルヴィッヂ氏が来日。

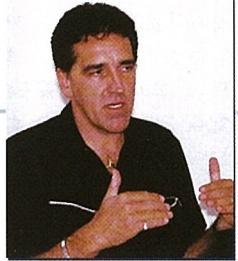
• Dr.Mantello Study Report •



レドックス制御とFPPの関係性

レドックスという言葉を聞いたことがあるでしょうか。日本語に訳せば「酸化還元」と同意です。実は、地球上に生息する生物は、動物、植物に関わらず、酸化還元反応を基礎にして生存しています。FPPの働きを解明する上では、この反応が重要な意味合いを持っているようです。現状の研究報告とともに今後の展望を探ります。

Dr.ピエール・マンテロ
大里研究所 所長
医学博士
生理学、免疫学、
血液学、生化学

レドックス制御システムで
人間は日々成長し衰退する

“酸化ストレス”という言葉を最近よく耳にするかと思います。紫外線、放射線、重金属といった刺激が、酸化ストレスの原因であるとされています。酸化ストレスは、発ガン、老化、動脈硬化などの原因として、今日、稀代の悪者扱いを受けているのです。しかし、軽度の酸化ストレスは、生体の免疫活動を誘導します。つまり、酸化ストレスを受けたことを感知し、抗酸化物質と呼ばれる物質が働き出す仕組みになっているのです。レドックス制御とは、この仕組みと抗酸化物質が行う酸化ストレスに関与する物質の機能調整を指しています。人間は、体の中において、複雑でダイナミックなレドックス制御システムを作

動させることにより、日々生まれ変わるとともに、成長し、衰退しているのです。

抗酸化作用&免疫機能促進
FPPの作用=レドックス制御

FPPの働きを解明する上で、このレドックス制御を無視して通ることはできません。数々の基礎研究結果や臨床データからも、FPPが抗酸化作用を有し、酸化によって損傷を受けた細胞の修復促進（免疫機能促進）に関与している事実を掴んでいます。この働きこそがレドックス制御そのものなのです。ただ、FPPがレドックス制御システムの、どの過程で、どのように影響するのかは、はっきりしていません。それは、システムそのものが、あまりに難解で、解明されていない点が多いからで、

近い将来、明らかになることでしょう。

細胞の酸化ストレスを軽減し、レドックス制御が正常に機能する体は、日常の食事から必要な栄養素を十分に吸収できる体でもあります。FPPは、高い抗酸化機能を持つとされているビタミンや、栄養分の吸収に重要な役割を持つミネラル類を含んでいません。にもかかわらず、それらとよく似た働きをするのは、このレドックス制御が鍵となっているに違いありません。今後も、FPPの働きを深く追求することで、数多くの興味深い報告がなされることを確信しています。



FPPの基本的な摂り方

ストレス	体調	摂取量・回数
I	●良好 ●健康維持のため ●老化・加齢に伴う退行性の病気予防	1包(3g)～2包(6g)/日
II	●体調不調の自覚あり ●時々痛みがある場合も	2包(6g)×1～2回/日 (2包～4包/日)
III	●医師より病気の診断あり ●痛みが絶えずある	2包(6g)×2～3回/日 (4包～6包/日)
IV	●重篤な病状にありQOLを望む	3包(9g)×3回/日 (9包/日)

午前10時、午後3時(食間)、または就寝前に、口のなかで唾液で溶かして食べます。食べた後10分間は飲食を控えて下さい。FPPが唾液と混ざり、体の中で活性な状態になります。

食間	食間	就寝前																
6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24

摂取量および回数は、自分のストレスの段階と体調に合わせ、生活のなかで無理のないように調節します。

左表は、大里研究所による臨床研究を基にした摂取量の目安です。

●本レポートについてのお問合せは下記までご連絡ください。